

児童が有意に多かった ($p < .10$)。このことについては、次の「友人関係」の考察と合わせて述べる。④友人関係の中の「ふれあい」(本当の気持ちを話す)について対応のあるt検定 ($p < .10$)、結果では有意に高くなり、「ふれあい」傾向が強まった。上述の「助け合いながら勉強したくなった」傾向結果と合わせて考察すると、瞑想することによって、独立心が強まり一人で勉強する傾向になり、友人とのふれあいが強まり、正直な気持ちを話す傾向になったのかもしれない。今後の瞑想継続により、どのように変化するのが期待される。先行研究では、禅やマインドフルネス瞑想を深めることにより人格的なプラス方向の結果が多く示されている。心身共に発達途中の児童であるからこそ、まず自身自身の欺瞞性を除くことが人格形成の一步と推測。⑤学習意欲尺度の中の「反持続性」で有意傾向 (サイン検定 $p < .15$) が示され集中力の育成傾向がみられた。今後瞑想を続けることで有意に集中力が高まる可能性がある。

中学生への結果は、事前調査のストレスサー分類は、男女共に「友人関係」が多く、ストレスコーピングは、「サポート希求」においてのみ、女子に有意差 (分散分析 $p < .05$) が示され、調査対象女子は問題解決の協力依頼について男子よりも上手い様であった。事後アンケート結果では、心と体ともに「リラックス」十人、「体の力が抜けた」八人、「落ちついた」七人 (複数回答) という感想が多かった。

今後の方向性・改善点として、瞑想の長期実践、学校教育へ導入可能なストレス低減授業プログラムの開発、ストレスに関する主観的、客観的 (科学的) 双方の指標の開発が必要である。

さらには、脳科学方面における瞑想研究の進展が望まれる。

トルコの宗教教育とアレヴィー教育

—— エスニシティとの関連で ——

佐島 隆

アレヴィー／アレヴィーリキについて、それが不明瞭であるにもかかわらず、その教育という点では、一定の方向で、トルコの教育制度の中に取り込まれ、それも政府主導で「アレヴィー教育」が行われつつあるように見える。そこでトルコ共和国の中で現在 (そしてこれから) の教育の中でアレヴィー教育がどのように行われるのかを明らかにしたい。

まずアレヴィー認識については、文化であるのか宗教であるのかなど幾つかの議論があった。アレヴィーのアイデンティティというよりも、どう認識、認定するかであるが、イスラームの中に入るとすると、タサウウフ (イスラーム神秘主義) の一つ、「アレヴィー・イスラーム」というもの、あるいは一つのメズヘブ、シーア派の中の一つ、またイスラームとキリスト教のシンクレティズム、また一つの生活の型式として考え、習慣・風習という文化、イスラームの外にあるとすると謂わば「アレヴィー教」という宗教など様々である。(ただしアラブ・アレヴィーはヌサイリー派であるとして確定されている。) とところでトルコ共和国の義務教育は変わる。これまで教育体制は5+3+3制であり小学校の五年と中学校三年が義務教育であった。これが二〇一二年九月から義務教育の4+4+4制となる。小中高の宗教教育という点では、普通学校の中等部・

高校における「宗教文化と道徳の知識」等の科目がそれである。宗教(イスラーム)教育という面で見ると、他に、国民教育省管轄のイマーム・ハティプ校と宗務庁管轄のコーラン・コース等がある。

国民教育省の普通教育を中心とする。その中で宗教教育を司る部局は国民教育省宗教教育総局(Millî Eğitim Bakanlığı Din Öğretimi Genel Müdürlüğü)である。その部長の見解からアレヴィーについての認識(二〇一二年八月二三日インタビューの一部)を示す。まず、アレヴィーは宗教 Din である。それもハジ・ベクタシ・ヴェリに連なる一分派(Kol)である。従って、アレヴィー・ベクタシということになる。ハジ・ベクタシ・ヴェリに関する『マカラート』などがその思想の中心となる。また普通学校における宗教教育は、それ以外の「宗教」の人が授業を受けることは拒否できる。例えばキリスト教徒やユダヤ教徒や「アテイスト(Ateist 無神論者)」などの生徒は、その授業に代わり、「メディア」「手工芸」などの授業でその単位を代替できる。「以下省略」つまりアレヴィーはベクタシの一分派、従ってイスラームの中に属す。つまりムスリムであるので、「宗教文化と道徳の知識」などの科目を、ムスリムと一緒に授業を受けなければならないという見解である。アレヴィーは他の宗教であるという理由で代替授業は不可能となる。この見解であると、これまでムスリム(それもスンニー派)との違いを主張してきた多数のアレヴィーは強烈なストレスを感じるようになる。他の科目を受けるためには「アテイスト」とならざるをえず、かつてのアレヴィー⇨アテイスト⇨社会主

義者・共産主義者⇨反政府的傾向という図式の中に投げ込まれることになる。このように一九九〇年代に「アレヴィーとは何か」と関心を持たれ、自らを中央アジアに結びつけることもあり、またイスラームの内か外か等様々な議論があったにも関わらず、この二十年で政府主導あるいはそれに準ずる形でアレヴィーの「見解」がつくられてきたことも観察できる。宗教教育の認識の仕方はアレヴィー内部の軋轢、亀裂を深くすることも考えられる。(アレヴィーにとって自己認識の不明瞭さは多くの議論を生み、それはドイツ等海外のトルコ系移民にとって、単なる自己認識、ルーツ探索にとどまらず、死活問題、生存戦略でもあった。)彼らにとつてこの教科書、宗教教育は深い亀裂を生む可能性を孕みつつ、イスラームの影響が見られることから、イスラーム(スンニー派)への同化の可能性をも含んでいるのである。

ドイツにおける宗教科の歴史

——「他者」とのかかわりを読む——

石川 智子

現代社会の特徴として多元化やグローバル化が指摘されるようになって久しいが、そうした社会にあつて、「他者」の問題は新たな切実さを帯びることになる。宗教が関わる領域においても「他者」の問題はさまざまなレベルでその姿を見せる。諸宗教の「対話」や「共生」が時代の価値として喧伝される一方で、宗教間の「衝突」が指摘され、宗教への「嫌悪」が公に語られる。こうした状況の中で必要なのは、「対話」にせよ「嫌